

▲家族史Vに関する私の問題関心

利根川・家族・そして地域史

阿由葉 司

最近利根川流域の地域のあり方に関心をもっている。「歴史をふまえた新たな利根川流域の地誌の必要性を痛感している」と、利根川の洪水を扱った小文で指摘したが、ここでは、別の視点から考えてみたい。

利根川流域（ここでは特に下流域）においては、利根川の水運が大きく取り上げられてきた。近世初頭の利根川の東遷以降、利根川は交通の大動脈として機能した。したがって様々な面で利根川流域が川を通して結びつき、共通面をもつことは首肯できる。家族史に関する点では、通婚などが問題となつてこよう。利根川の下流域では、利根川の中・上流、利根川の支流の鬼怒川、小貝川、渡良瀬川流域との結びつきが認められるところであるが、残念なことに実証的な研究はこれまであまりなされていない。

また、利根川下流の低湿地帯は、そのほとんどが近世中期以降の新田開発による村落であり、その新田開発のあり方も、近隣の古村からの出作をはじめ、町人請負など様々である。そうした中注目されるのは、印旛沼周辺に利根川流域から同時期に数百人に及ぶ入百姓があったことが史料的に明らかにされたことである。このような新しい集団による村落空間の出現で、日常生活レベル

の例えば祭祀、葬制あるいは言語などで、既存の周辺地域といかなる変化がもたらされたか、もっと関心を払うべきであろう。

川については、水が上から下へ流れる道理のごとく、どうしても川に沿った地域に目が行ってしまうが、川をはさんだ地域のあり方を見ずしてはならない。現在でこそ、利根川の架橋が限られているため、自然的境界が社会的境界となっているが、かつては数多くの渡船により活発な対岸交通がなされていた。利根川の対岸交通については有末武天氏の研究があるが、個々の地域に即した研究は仄聞しない。

現地での聞き取り調査などでは、利根川の対岸との通婚が盛んであったことがしられるが、こうした通婚圏の成立には、その前提となる交通路の存在や、日常的な生活圏の拡がりがあった。こうした点について筆者は「道しるべ」(近世中期)明治のもの)の存在に注目するようになった。道しるべの位置や銘文。(川に近い位置にあるものに対岸である竜ヶ崎、江戸崎、新治といった地名が散見する)などがかつての交通路の復元や、生活圏の範囲を設定する素材になりそうである。

とまれ、一定の拡がりのある地域を設定しその在地の史(資料)を活用した地域史の叙述をすることが課題だと考えている。

- (1) 拙稿「利根川と水」(『千葉史学』7)。
- (2) 寛文十一年「国手形寺請状改書綴」(『本埜村史史料編』近世Ⅱ所収、同書解説参照)。
- (3) 有末「利根川の対岸交通」(九学会連合『利根川』)。

(千葉県立大根根博物館・日本中世史)